■令和時代の猫草子

青木蓉治（昭和36年卒）

1：猫の主な特徴と習性

猫よりも犬が好きだ。

獣医診療所を開設する親族宅に、2匹の猫がゲージ生活を観察すると、自由で気まま、気位が高くツンとした素振り、いま甘えている途中に離れ、いなくなる。

そんな自由気ままなところが、猫好き魅力の特徴とみています。この猫が、水を積極的に飲む場面を観ていない。猫飼育の資料に、猫の先祖は砂漠地帯に生息するリビアヤマネコと記されている。猫は水場の乏しい環境を生き抜くために、水を直接摂取しなくても食べ物から必要な水分を確保ができる遺伝因子DNAに書き込まれ承継されているようだ。

高校時代、藤沢八洲台（やしまだい）で下宿生活、母校の六会校舎は農学部の教習場・フナやヤマベ・ドジョウの生息する清流な小川が流れていました。

高校同級友人の鰹節持参で子猫を飼育した。今日の猫専用食餌は未販売時代。猫食は残飯に削り節に「魚が大好物」と猫食餌イメージが当時はありました。この猫の成長に伴い、スズメを狙い、ネズミを狩る日頃の様子から猫は基本的に肉食動物と学びました。**＊参考；本稿題名「草子＝おとぎ話」を意味します。**

2：国内固有の猫

国内固有の猫は長崎県対馬に亜種のツシマヤマネコが生息します。西表島固有種の「イリオモテヤマネコ」は山猫野棲で、氷期に大陸渡来のヤマネコが、間氷期に大陸に戻れなくなり、独自の進化した、イリオモテヤマネコの学「*Prionailurusbengalensis iriomotensis*」、英語は「Iriomote Cat」と呼称されます。猫の推定生息数は、環境省西表野生生物保護センター調査推定で約100匹、体重3～4 kg、体長は50～60 cmと報告記載があります。住民は、猫をヤママヤー呼び存在は知られていましたが、家猫の野良化か、新種か、1965年に正式命名まで不明でした。

猫の食餌は糞から、トカゲ、ヘビ、カエルやコオロギなどの昆虫、オオコウモリ、鳥類、テナガエビ、カメは甲羅ごと、イノシシの毛も発見されています。

猫の夜間行動の食餌探し習性のため、交通事故死が原因で生存頭数の減少。

近い将来に絶滅危険性の高いグループに属するようになるのでは。

3：猫渡来の過程は

猫と人間の関わりの初めは約9500年前、中東付近のリビアヤマネコの家畜化が始まりで農作物のネズミ対策用に飼育され、その後、地中海を渡ってヨーロッパに、さらに中国に伝わり、そして、6世紀（古墳時代）に仏教が百済（朝鮮半島）を経由し渡来しているようです。

7～9世紀（飛鳥～平安時代）朝廷は唐（中国）に遣唐使の留学僧「最澄と空海の2人を派遣した。天才型の空海（774-835）に対し地味な印象がある最（767-822）は平安以後の日本仏教の原型を創ったとされています。

留学僧が帰国に際し経典等をネズミの害から守るため船に猫を一緒に乗せてきたとする猫渡来が通説になっていました。しかし、この通説を否定する証拠が、2100年前の弥生時代に築造された兵庫県姫路市の見野古墳で猫足跡の残る須恵器が、2007年に発掘されたことで須恵器がつくられた時点で猫生息の証拠とされています。この翌年の2008年、長崎県壱岐島のカラカミ遺跡で、魚やヘビ、シカやイノシシの骨に混在し、イエネコの大腿骨など12点の骨が発掘されています。

縄文時代や弥生時代の人々が猫を飼育したのは、穀物や織物用の蚕を狙うネズミの駆除が目的だろうと推測されています。（姫路市教育委員会、「姫路市見野古墳群発掘調査報告」平成21年3月）

平安朝時代の末期に一般でも猫を飼うようになり、鎌倉の称名寺では、金沢文庫の蔵書の鼠害を防ぐため、宗（中国）から猫を輸入し、金沢猫と名付けられ、略してカナと呼んだと伝えられ、1594年（文禄3）豊臣秀吉の許にフイリピン国献の進物にアルガリア猫の名があります。近代の猫は明治以降にヨーロッパ種が飼育されています。かつて洋上を航行する帆船には必ず「船乗り猫（Ship's Cat）」が飼育され、猫の役割は、鼠が帆を張るロープや船体構造材の木材を齧り、また食糧を齧ることでペスト感染症予防として、一役かっていましたが、近年は衛生上の理由から猫の乗船は避けられているようです。

4：猫の遺跡発見される古墳築造

国内文化の原形を築いた奈良県の地形は、吉野川に沿ってほぼ東西に走る中央構造線により、南部山地（吉野山地）と中央低地（北部低地）に分かれ、北部低地帯は、瀬戸内陥落地帯の東部にあたり、断層により陥落した地溝盆地（奈良盆地）を中心に生駒・葛城・笠置の各山脈、竜門山塊、奈良丘陵の500 m～600 m山地を縫うように、交通網は大阪線や国道165号・166号・369号・370号が走っています。

この地に、千数百年前、朝鮮半島の百済、新羅、高句麗より学者、技術者が多く渡来して、奈良国立博物館の展示「仏像、仏画、経典、工芸美術品や考古遺品など」閲覧できる文化を現代に承継しています。

当時、天皇を中心の政府が、710年（和銅3）から784年（延暦3）の74年間、奈良で行政を行っていた地名を「奈良時代」称しています。ちなみに韓国語で「ナラ」は「国」を表します。

この奈良には、日本全土を支配下に置く大王（天皇）以前の時代に、各地域のトップの豪族が権力を誇示するため、豪

族間の序列を古墳（墓）の大きさで決めていたという説があります。遺跡は奈良県の大和地方に前方後円墳が3世紀中頃から4世紀の間、エジプトのピラミットの築造に類似し、土を高く盛り上げ墳丘（墳墓）づくりは、工事を指導監督）する人、工事で使う道具を造る人、食事の世話人が1日6,000人ほどの人々が従事者していたようです。古墳はその後各地に広がり、7世紀までに九州南部から東北地方中部まで、大小様々な古墳が分布し、今日、都市開発で新たに発見されています。

5：国内最初の猫の飼主は天皇

国内初の猫飼い記録は『宇多天皇御記』59代の17歳で天皇即位の宇多天皇（867～931）は、清少納言が仕えた定子の夫で、菅原道真を重用し親政を行っています。58歳で病死の58代光孝天皇（こうこうてんのう）より黒猫を譲り受けた記録が『宇多天皇御記（寛平御記）』の一節に「我正月一日狸となりて汝が家に入るとき、供養飯害種の味の物に飽かしめよ」と記され、9世紀の仏教説話集「日本霊異記」に「狸」と書いて「猫」と読ませる表記は中国輸入からだと伝えられています。父親から譲り受けた、黒猫を日記に飼育の記述が多く存在します。例えば、「愛其毛色之不類。餘猫猫皆淺黒色也。此獨深黒如墨。爲其形容惡似韓盧」は「私の猫は類まれな毛色をしている。他の猫は浅黒い色なのに、私の猫は墨のような漆黒の毛色で美しい。まるで韓盧（韓国の名犬）のようだ」と、そのほか「他の猫よりも素早く鼠を捕まえることができる」「伏せているときは足もしっぽも見えないため、まるで黒い宝玉のようだ」「歩くときは音もたてず、雲の上の黒龍のようだ」とも記し、愛猫が子猫出産祝いの「産養い」行事に右大臣や左大臣（総理大臣クラス）呼び、宮中で盛大に子猫誕生の初夜から9日間も宴を催しています。

行事は「産養（いうぶやしない）」赤ん坊が生まれてから3日目・5日目・7日目・9日目の夜に祝う行事のことで、公卿、藤原実資の日記「小右記（しょうゆうき/おうき）」に「一条天皇の行動が全く理解できない」と記しています。

天皇の居住部屋に自由に出入りできるのは、従5位以上の官位を有する女性「命婦の御許」に限られているため、猫に「命婦の御許」の敬称を与えています。

唐猫は平安時代に、特に人気の様子が、後の天皇の花山天皇が詠んだ「敷島の大和にはあらぬ唐猫の君がためにぞもとめ出たる」つまり「日本の猫ではなく中国の唐猫を、昌子内親王のために特別に探し出した」と、特別な猫として扱われていたことが伺えます。平安時代の猫は戸外に出られないように首に綱を付け、その先に錨を付けていた絵が残されています。

6：猫の放し飼いの始まりは

古代・中世の猫は、基本的に繋いで飼育していました。

鎌倉後期の『石山寺縁起絵巻』に、首綱でつながれた虎猫が店の出入り口に描かれていますが、1602年（慶長7）京都所司代「猫放し飼い令」で「京の町では猫の綱を解いて放し飼いにしなさい」の様子が、猫の物語「猫草紙」の挿絵に見られます。

この放し飼い令の背景は、京洛中の人口増加で食生活向上の結果、鼠害対策用で放し飼いになりました。なお、江戸幕府5代将軍綱吉「動物愛護」、「いわゆる生類憐みの令」で、今日に至るも、猫は完全に繋留無しの自由を手に入れています。

この猫の市中放浪浮世絵を江戸の絵師の歌川国芳「猫飼好五十三疋」残し、彼自身も猫を5・6匹飼うほど猫好きと言われています。

一方、古来より犬も基本的に放し飼いでしたが、1717年（享保2）5月、幕府8代将軍徳川吉宗より『町方之犬共　御拳場（こぶしば）之方え捨候儀有之由相聞、不届候、若右通族有之は、曲事可申付候、町々其所ニて**犬猫共に繋置侯様**に、急度可触知者也』と、将軍、自ら拳に鷹をすえて狩りをする猟場内に、犬猫を捨てていることを聞くが、**犬猫は繋ぎ飼育の**指示を出ています。吉宗は、「いわゆる生類憐みの令」廃止の当人が、猟場内に犬猫を捨てるのは「とんでもない」と、権力者の身勝手な振舞いがみられます。『出典：御触書寛保集成20　殺生之部』

1945年8月敗戦で戦地からの帰還兵や地方疎開者で、市中人口密集地で放浪犬による咬傷危害の増大、狂犬病被害者増加、これを受け1950年（昭和25）8月26日に公布の狂犬病予防法の普及、犬の散歩には首輪とリードが課せられています。

7：猫飼育の世帯数は

総世帯数は5,976万世帯「総務省資料2022年（令和4）」のうち、全国犬猫飼育実態調査12月に発表報告書に、517万2,000世帯の約11軒に1軒で猫：883万頭の飼育の表記があり、犬：705万頭と記されています。

なお、猫飼育時の平均寿命15．62歳：【犬14．76歳】寿命で横ばいを示し、猫飼育順位と種類では、1位：雑種（ミックス）・2位：アメリカンショートヘア・3位：スコティッシュフォールドです。

また、マイクロチップの装着改正動物愛護法「2022年6月から施行」に伴い、ブリーダーやペットショップで販売に供する猫・犬に、マイクロチップの装着が義務化されていますが、すでに各人が飼育する猫・犬のマイクロチップ装着は努力義務とされています。

8：野良猫が希少動物347種を捕食（From Academia：日経新聞2023・12・15）

米国オーバーン大学（Auburn University, AU）アラバマ州オーバーン（Auburn, Alabama）、1856年創立された州立総合大学は、『放し飼いや飼主がいないイエネコが2,000種以上の動物を捕食し、そのうち約2割s47種は絶滅の恐れ或る種であることをあきらかにした。イエネコは9000年以前に家畜化され、南極を除く全大陸に広がった。生態系に影響を与えているとされるが、地球規模で調査した研究はこれまでなかった。研究チームは、イエネコが捕食している動物種の記録データを多量に集めて、分析した。日本でも希少動物種の捕食が問題になっている。今回の成果はイエネコの管理方法などの検討に役立つ可能性がある』**記事の掲載があります。**

9：猫登場の古文書

（1）枕草子

清少納言の著書と言われる「枕草子」に「飼い猫」は平安時代に唐（中国）から渡来し、猫を唐猫（からねこ）」やネコマと称し、またネコマの下略でコマコマと呼んでいることや、「猫はうへのかぎり黒くて、他はみな白からん。」「猫は背中だけ黒くて、ほかはみな白いのが良い」猫好きだったと思われます。

（2）源氏物語

紫式部の著書「源氏物語・若菜上」に六條院で蹴鞠の試合の時に、太政大臣の子息の柏木が思いを寄せていた三宮の姿を偶然見つけることができたのは、逃げ出した愛猫のおかげでとする記述登場する猫は「いと小さくてをかしげ」な1匹と、やや大きい1匹の計2匹が登場し、この猫に綱つけて飼育が書かれています。

（3）更級日記

菅原孝標女の著書「更級日記」に猫に「猫のいと長う鳴いたるを驚いて見れば、いみじうをかしげなる猫なり」という一節が書かれており、これは孝標女が少女の頃に姉と一緒に上品な迷子猫を可愛がる内容の記述です。しかし、この猫は家の火災に際して死亡した様子から、猫は繋がれて飼育されていたと思います。

（4）今昔物語

平安時代末期の「今昔物語」に、猫を怖がる藤原清廉という男の一節が、彼は「前世は鼠にてや有りけむ」つまり「前世がネズミであったために猫が苦手なのだ」と、猫を恐れる藤原清廉の噂を聞いた若者たちは、真相を確かめようと清廉に猫をしかけます。「清廉、猫だに見つれば、極き大切の要事にて行きたる所なれども、顔を塞ぎて逃げ去った」と、猫嫌いな彼は、猫を見て大切な用事も後回しにして逃げてしまったと書かれています。

10：商売の縁起物の猫の由来

猫は中国唐代の随筆『酉陽雑俎』（ゆうようざっそ）に「俗に猫が顔を洗い耳を掻けば即ち客至る」と中国の俗信が記されています。

なお招き猫には右手を上げているのは金運を招き、左手を上げているのは人脈を招き、両手を上げた猫は金運と人脈の両方を招き入れるといわれています。

（1）豪徳寺の招き猫

東京都世田谷区内の曹洞宗の大谿山 豪徳寺が招き猫で有名なお寺で、1624～1644年の江戸時代初期、寛永年間、大河ドラマ「おんな城主直虎」の主人公・井伊直虎の孫の直孝が、豪徳寺の門前で手招きをする猫に誘われ、寺で休息したところ落雷の難を逃れたというもので、当時、荒れ寺でしたが、和尚の手厚いもてなしを受け、落雷にあわず生命の危機を逃れることができたのは、仏の因縁とし、この寺を井伊家の菩提寺に決め、田畑など寺に寄進で寺は隆盛したとする猫の由来があります。猫は3年飼っても3日の恩しか知らないというが、「猫檀家（ねこだんか）」では、貧乏寺の飼い猫がその呪力（じゅりょく）によって檀家を増やし、恩返しの話があります。

（2）招き猫人形発祥は、浅草今戸焼から、

東京都台東区の隅田川上流の白髭橋の近くの山谷に所在する「今戸神社」は、浅草七福神の福禄寿も祀られ、福（幸福）と禄（生活・経済の安定）と寿（健康にして長命）の三つの福の神として、伊弉諾尊（いざなぎのみこと）と伊弉冉尊（いざなみのみこと）という夫婦の神様も合祀さられ、結婚の神、縁結び、恋愛成就、夫婦円満の利益があるようですが。1573～1592年（天正年間）安土桃山時代の初頭から、この地域は焼物に適した粘土が採取されたため、焼の招き猫人形の発祥は浅草今戸が定説、また付近は瓦や生活雑器や狸の置物をつくり商にしています。

この神社に新選組で有名な沖田総司の終焉の地の看板や幟が目立ちます。沖田総司の墓所は港区六本木の中国大使館近くの専称寺に在り、終焉の地に関しては、今戸神社と千駄ヶ谷植木屋の説がありますが、不明です。

蛇足ですが、1864年（慶応4年1月3日）戊辰戦争の初戦となった戦鳥羽伏見の戦い（とば・ふしみのたたかい）の直前、新選組局長の近藤勇は狙撃で銃創を負い、沖田総司は寺田屋切込み結核で吐血、共に療養のため江戸に戻り、沖田総司は千駄ヶ谷の植木屋で身元を隠すために「井上宗次郎」と名乗り療養中の庭先に黒猫が庭に毎日きては総司を見つめ、嫌がった総司が愛刀で切ろうとするが、体力の落ちているため斬ることが出来ず猫は逃げてしまい、「猫さえも斬れない

と絶命」したという子母澤寛著書の「新撰組物語」挿話にあります。

（３）浅草新吉原「三浦屋」の花魁（おいらん）と猫物語

5代将軍綱吉時代、江戸明暦大火で日本橋人形町近くの吉原遊郭は消失し、台東区千束に新吉原で営業の遊郭「三浦屋」に猫好の薄雲大夫（武家娘）は花魁道中にも愛猫タマを抱いて道中し、寝床や厠まで一緒と猫かわいがりの「薄雲は魔性の猫に魅入られた」との噂を案じた三浦屋の主人は、厠（トイレ）に入ろうとする薄雲の足元にいたタマの首を打ち落とします。ところが切られたタマの首は宙を舞い、厠に潜む大蛇を咬み殺して薄雲を助け、タマの死を嘆き、悲しみに暮れる薄雲のため、贔屓客が高価な香木の伽羅で猫の姿を彫らせて贈ったとか。その猫人形の類似品が浅草で売られ、招き猫人形の元との説もあります。

（４）日光東照宮の眠り猫

寺や神社に猫の彫刻は珍しくないが、栃木県日光の徳川家康公の墓所がある奥社の参道入り口、東回廊潜り門に、牡丹（ぼたん）花の下の彫刻猫は、寝ているように見えるが、徳川家康を守護するため、いつでも飛びかかれる姿勢はしている。

その裏側には雀が舞い遊んでいる彫刻は「猫が寝るほどの平和」徳川幕府政権は安泰の意図があるそうです。神社の白馬小屋に有名な3猿彫刻があり、埼玉県秩父神社本殿にも3猿彫刻があります。

11：猫の祝い伝説と人の葬儀風習「出典：風俗辞典」

三重県松阪市では、12月8日を「猫随神（ねこずいしん）」この日猫に御馳走する

風習が、また岩手県気仙（けせん）郡では2月1日「猫の年取り」と年重ねの祝いに銭と餅（もち）を道路の十字路に捨て、厄払いをします。また葬式の際、死体の上に刃物を置き、猫を遠ざける風習として、葬送時に猫が火車（かしゃ）となって風雨をおこし、棺を空中に巻き上げるからだとされています。なお沖縄の風習で、猫が家人に災いをもたらすことのないように、猫の死体を木の枝に首吊りで葬り、呪文（じゅもん）を唱える風習が資料にありますが、風習は中国福建省から琉球大国時代に伝来しているようです。

12：話に登場する猫

猫と狩人（かりゅうど）「山梨県の童話」で、狩人が山に出かけるので、鉄砲玉を数えていると、それを見ていた飼い猫が山で怪物となって狩人を襲い、しかし、狩人は用意した玉で猫を射ち殺し助かります。

犬と違い、飼い猫は、魔性のものとして捉えられることが多く、江戸時代には講談や浮世絵に化け猫が登場します。茶・黒・白毛の三毛の猫は各地で、一貫（約4kg）目位に太った猫になると、化けるといわれ、年老いた猫は尾が二つに割れて「猫又（ねこまた）」になると『徒然草（つれづれぐさ）』に「奥山に猫又といふものありて……」とあり、藤原定家（ていか）の日記『明月記（めいげつき）』にも1233年（天福1）の南都に猫又が現れ、一夜に7、8人の死者の記述があります。

夏場恒例の落語や芝居で、鍋島（なべしま）・有馬（ありま）両家の猫騒動が登場します。半面、舟乗りは、航海の守り神に三毛の雄猫を珍重しています。

13：猫が十二支で除外の話

一つは、涅槃（ねはん）（釈迦（しゃか）入滅の日といわれる2月15日）のときに猫が駆けつけなかったからとするもの。

二つめは、神様が正月にやってきた順に十二支を決めるといわれた際、鼠が猫に日を遅らせて告げたために除外されてしまったとするもので、それ以来、怒った猫が今日に至っても鼠を捕獲する由来とされています。

以上

14：犬の狂犬病と猫の狂犬病

学兄諸氏は人畜感染症学の修得者、「坊主に説法」の喩えで「申し訳ありません。」

本症は国内の感染症法で4 類疾患に定められ、人畜共通感染症で動物から人の感染はあるが、人から人への感染は起こらないとされています。

なお狂犬病の疑い診断判定時、医師は、直ちに最寄りの保健所長に届出義務が、感染症法一部改正（2003年11月施行）で課せられています。

また国内においては、犬の予防接種、放浪犬捕獲、動物輸入検疫の継続的努力の結果、1957年（昭和32）猫の狂犬病発症記録を最後に発生事例はありません。「**備考：猫の狂犬病発生の頭数や都道府県は、調べましたが不明**」

CDC（Centers for Disease Control）『アメリカ国内・国外を問わず人々の健康と安全の保護を主導する機関』本病を人獣共通感染症と位置付けています。

（１）発症事例数と回復事例

WHO推計に、毎年、主にアジア・アフリカの他150ヵ国の地域で、本病原因の死者約5万5千人以上と記録されています。

本病、国外旅行先で犬咬受傷者1970年ネパール旅行1名、2006年フィリピン旅行帰国2名、2020年フィリピン旅行

帰国者1名は国内加療8ヵ月後に死亡しました。1957年以降、狂犬病清浄指定国に含まれていましたが、2020年の事例で、2012年1月に指定削除されています。

本病希少な回復事例が、「日本獣医師学会霊長類フォーラム：人獣共通感染症（第176回）4/07/2007」文献に掲載されています。

この事例は2004年、米国ウイスコンシン州でコウモリに咬まれ発病後、ウイスコンシン州ミルウオーキーのウイスコンシン医科大学病院のロドニー・ウイロビー準教授が主治医治療を受けた患者の回復がCDC obidity Mortality Weekly Repor「WMMR December 24, 2004/53 50 ; 1171-1173 」で報告されています。

編者は20歳代、研修の一環で都立衛生研究所所有「人の狂犬病発症時の学術記録フイルム映像」で本病感染の恐ろしさを学びました。

後年、本学同窓開催時の研修用に借用を問合わせましたが、研究所に保存記録保存不明とのことでした。

（2）猫の狂犬病症状「文献：東京都動物保護管理・獣医衛生業務必携」

・潜伏期は他の動物に比較して不安定で4～5週間とも言われている。
・発病の初期は、静かな暗い所に隠れ、多くは死に姿を見せない。
・発症時は眼光が鋭く、主に人畜の顔面や背面に飛びかかる。
・犬に対する先天性の恐怖心が消失しているので、猛然とおそいかかる。
・食欲減退、異味症、声のかすれ,唾液分泌過多、時に恐水症状がみられる。
・犬に対する咬傷加害率は6.0％位、他動物に与える咬傷加害率は不明。
・へい死する経過は、ほとんど狂騒性で3～6日、短い時は2～4日。

（3）猫の狂犬病予防ワクチン接種は

現在、猫の狂犬病予防ワクチン接種は飼主の努力義務とされていますが、海外交流の自由化で輸入動物の増加状況下で、狂犬病ウイルス侵入を軽視するのは、新型コロナウイルス（アルファ形）2019年侵入を鑑みても、愛猫者にクチン接種を積極的に推奨すべきと認識します。

一方、国内のイヌの狂犬病予防接種率は40％台まで低下傾向、WHOは狂犬病の流行抑制に70％の接種率が肝要と警告していますが、取扱業者、一般飼養者等は、本病感染時の恐ろしさに対する危機意識の低下が懸念されますが、獣医師も本病予防の普及活動「備えあれば憂いなし」の再認識が求められます。

（4）狂犬病ウイルス「出典；MSDマニュアル」

狂犬病発症の原因ウイルス（rabies virus：RABV）は、ラブドウイル（*Rhabdoviridae*）科リッサウイルス（*Lyssavirus*）属に分類され7つの遺伝子型1に分類。

ウイルスは直径約75 nm、長さ100～300 nmのRNAウイルスで、形状は弾丸型でウイルス粒子は、脂質二重膜のエンベロープを有るため、アルコールや界面活性剤、次亜塩素酸等の処理を行うことで、エンベロープが破壊され、ウイルスは容易に不活化するとされています。

（5）感染機序「出典；MSDマニュアル」

感染動物の唾液中に含まれる創傷部位のウイルスは、組織細胞で増殖、神経親和性が高く感染部位近くの末梢神経を介して神経線維を求心性に脊髄に移動し、さらに脳細胞に至り、ウイルスは増殖、脳から別の神経を介して唾液腺を含む全身局所に遠心性に移動することで、最終的に唾液中にウイルスが排出されます。

これまで医療従事者が、挿管・吸引等を行うに際し、術者の粘膜・傷のある皮膚にウイルスを含む唾液等が付着した場合、感染の可能性を否定できません。症状の疑わしい動物の診察時は確実にウイルス汚染防護が肝要。

以上

＊お礼：「本稿の笑読、お疲れ様です。記述に誤りがある際、お許しください。」

＊本稿編纂の資料は、蔵書の「辞典や歴史書物、起源の謎書」と文中記載。

＊原因の考察：

（1）質問語句の入力索引が不慣れなため、AIが沈黙していました。

（2）ChatGPT-3の利用は無料の人工知能（AI：Artificial Intelligence）に日本語獣医学関係の学習用データの不足？期待する情報の助言は得られませんでした。

＊懐古：

時がたっても笑い合える。そんな関係でいられる幸せはありがたい。

1957年（昭32）三軒茶屋校舎の入学時代の仲間たちだ。優等生でもスポーツが得意だったわけでもない。

母校教授や先輩、良き仲間の人生指導と、助言があったことで、学窓を巣立つことができ、年齢は重ねて、日々を過

ごし、暮らす生活を送るなかで、時折電話で、仲間たちと何でもない、思い出話で盛り上がれるのが心地よい。
　ただただ、寂しいことは、仲間が、次々と彼岸に渡り、此岸（娑婆）仲間が増えないことと、学生時代は名前の呼び捨てが、いまは先生と、呼ばれることだ。